Nepal Blind Support Association

ネパールの視覚障害者を支える会会報
第 25 号 2009 年 10 月
NBSA：http://NBSA.sakura.ne.jp/
主内容：就職おめでとうプララダ君/時の人/活動報告/ネパールとの出会い /平和復興省の活動と課題/ネパールよもやま話/ネパールの民話/事務局便り

いつか見たヒマラヤの青い空

それは僕が 13 才の誕生日を迎える直前の事だった。
期末テストの問題がどうにもかすんで読めない。
どうしよう…。冷や汗がどっと吹き出した。
「先生、問題が読めません」
僕はとっさに手を上げて叫んだ。
「なんだ、どうした。じゃ、先生が問題を読んでやるよ」
僕は先生の読上げる声を注意深く聞いた。
だが書けない。というより自分が何を書いているのか、さっぱり読めないのだ。

僕は震える足取りで家に戻った。
そして翌日から僕は病院を転々としたが、
2 週間もしないうちに完全に視力を失った。

僕は今年 27 才になる。
もう失明してから倍の年月を生きている。
今後その何倍も視力が回復しないまま生きていくのだろう。

だんだんと慣れていったとはいえ、様々な苦しみも悲しみもあったし、将来に不安を感じると、夜中に夢をみて目がさめる。

僕は今でも時々目が見えていた子供時代を思い出す。
とりわけはっきり覚えているのは、バクタプルの高台から見たわが祖国ネパールの、白く輝くヒマラヤとぬけるように澄んだ青い空。

（プララダ・タパ　2009 年現在 30 才。バクタプル市出身）

写真上：プララダさん 2009 年 9 月 16 日撮影
写真下：ヒマラヤとネパールの国花「ラリーグラス」

もうおなじみになった方も多いと思いますが、これはネパールの視覚障害者を支える会(NBSA)のパンフレットからの抜粋です。タパさんは、現在 NBSA の副会長。そして、点字情報誌「タッチ」の編集責任者です。今日はタパさんの近況をお知らせします。

プララダさんは、現在地元の公立学校で社会科を教えています。
教師になりたかった理由は、他の仕事がなかったこと、それに経済的にどうしても独立する必要があったからと言います。プララダさんは、様々な社会活動や、障がい者団体に勤務したかったのですが、現在他に職がなく教師になった次第です。「教員のポストは前々から考えていたが、自立を迫られていたし、そして何より僕も結婚を考える年になったのです」と言うのがプララダさんの素直な心境。

さて、プララダさんを取り巻く、職場の環境はどんなものでしょうか。
「今のところ、授業の準備は全部自分でしています。自分が学校時代に使った点字の社会科のテキストが、今になって役にたつとは思いませんでした。また、生徒が色々準備してくれます。生徒の反応ですが、初めは緊張していたようですが、徐々に打ち解けてきました。小中学校合わせて 512 人、そのうち 60 人の生徒を私が担当しています。

私は、ネパールの視覚障害者を支える会ＮＢＳＡの役員もしていますが、他の視覚障がい者団体とは一味違いとても斬新です。私は点字隔月紙「タッチ」の編集委員で、情報の共有化がいかに重要か身を持って感じています。また、ユーザーの視覚障がい者と、晴眼者のボランティアがお互いに協力しながら会を運営するスタイルは、特に若い人に人気があります。

時の人　ネパール初　視覚障がいの女性公務員

●ニーラ・アディカリさん、就職おめでとう！
ニーラさんは 28 才の先天盲の女性です。彼女は日本点字図書館のトレーニング　プログラムで日本に招聘されたこともあり、大変な才女です。日本から戻り、音声パソコンの指導などをしていましたが、このほどパタンの市役所に就職がきまりました。現在研修中で、どの部署に配属されるか決まっていませんが、ネパールで視覚障がい者が事務職で採用されたのは初めてです。ネパールの労働省では、障がい者の雇用率が３％から５％となっていますが、現実は１％にも満ちていません。ニーラさんの就職は、将来ネパールの障がい者に希望と勇気を与えることでしょう。皆さんも日本の空の下から、ニーラさんにエールを送ってください。

２００９年４月～９月の活動報告

★４月：定例活動

先月同様、電力の不足のため、カセットテープ、ライブラリーと点字隔月紙の編集が予定通りできませんでした。しかし、２００８年度のカセットテープ作成目標数６０冊は、４冊及ばないだけで、朗読ボランティアさんたちが本当に頑張ってくれました。点字情報紙のほうは、残念ながら、隔月発行の、年間６冊を果たせず、５冊の発行にとどまりました。
その他の活動
小冊子、視覚障がい者の生活自立訓練の出版がやっと終わりました。原稿は早くから準備していましたが、ネパール語タイプや印刷などに膨大な時間を費やし、年度末にやっと完成。視覚障がい児の親の会などを経由して、今後、多くの人々に配布されます。もちろん音訳もしますので、自活をしている人々にもカセットテープにして送る予定です。

★５月と６月：定例活動

今年のネパールの新年は２００９年４月１４日に始まりました。ビクラム暦２０６６年。公のネパール暦はたいした行事もしませんが、ネパールでは正式な暦。その他、モンゴル系の民族が独自の正月を盛大に祝いますが、これはどちらかと言うと日本の旧暦に近いころに行われます。話がずれましたが、４月と５月は伝統的な行事が少なかったので、点字雑誌の発行、カセットテープの作成と編集はつつがなく進みました。点字雑誌は紙代の値上げなどの理由から、ページ数を削り、回し読みしてもらえるようにお願い、発行部数をかなりカットしました。

★７月：定例活動
カセットテープライブラリー
今月は利用者が少なく、比較的ゆっくりと作業に専念した。ＮＢＳＡではおととしからカトマンドゥの福祉短大の学生を１名ずつ、研修生を受け入れています。今年の学生は英語が堪能なので、学校教科書ライブラリーの朗読を、多数行ってもらいました。ちなみにＮＢＳＡの自作のカセットテープは、１面のイントロに音楽を入れています。本の内容に合わせて、若干音楽を変えている。ネパールの古典小説には民謡を、現代小説には冬のソナタ。軽い読み物にはリチャード、クレイダーマンなどと変化をつけていて、なかなかの評判。

★８月：定例活動
恒例のカセットテープの編集と貸し出しのほか、点字情報誌のタッチ１６号と１７号を作成配布。そのほか役員会１回。その中で点字情報誌の発行部数について討議された。紙代の節約で発行部数を少なくするという意見がでたが、ネパールでは点字の本が極端に少なく、学校の教科書以外はほとんど作製されていない。せっかく習った点字を忘れてしまうのはいかにも残念。そこで、発行部数はそのままにし、毎回のページ数を少なくすることになった。

先週ネパール西部のダンクッタ郡の、ラジオＦＭの編集者が事務所を訪問。ダンクッタは２年前までマオ派の戦闘で激しくダメージを受けたが。今では和解し仲良く暮らしているそうだ。そのラジオ局には６人の視覚障がい者がアナウンサーとして手伝いをしている。点字などの台本がないので、暗記した文章をそのまま読み上げるだけだが、なかなかスジがよいとのこと。当地の識字率は低く、読む本自体がほとんどないので、ＮＢＳＡが作製した小説などの音訳本を、ラジオ番組にぜひ使わせてほしいと申し出があった。こちらではＮＢＳＡ作成と番組の中で一言述べてくれればよいとし。数冊の音訳小説のＣＤを提供した。

★９月：定例活動
恒例のカセットテープの編集と貸し出しのほか、点字情報誌のタッチ１８号の編集。

●特別事業　途上国経済を勉強している東大生がNBSAの事務居を２日にわたり当事務所を訪問。初日はNBSAの活動紹介、２日目は数人の視覚障がい者を交えて、ネパールの視覚障がい者の事情など、オープン・ディスカッションを行いました。後、ネパールのおやつサモサを食べましたが、学生さんが大いに気に入り、お土産に持って帰る人もいました。

子どもの日クイズ大会。

今年は９月１４日、カトマンドゥ盆地内の盲学校３校の生徒を集めて競いました。この催しは２００３年から行っています。今年は経費節約のため、その他の事業を大幅にカットし、このクイズ大会だけは全国レベルで盛大に行いたいとネパール国営ラジオ局に番組の制作を依頼しましたが、法外な作成費用を要求され、遺憾ながら、例年通り、カトマンドゥ盆地内だけで行いました。平等な教育の機会さえ与えてくれるなら、障がいを持たされている子供も、他の子供たちとなんら変わりません、と毎年子供の日に訴えてきました。

それを国営放送が拒否するとは何事か、とＮＢＳＡネパールの役員は抗議をしたのですが、聞き入れてもらえず皆がっかり。でも、クイズ大会そのものは素晴らしかったです。
カトマンドゥ盆地からちょっと外れた、ドリケルの盲学校は他の学校と比べると、教育内容も設備もかなり見劣りし、クイズ大会では例年最下位でした。それでも、娯楽の少ないドリケルの生徒たちはＮＢＳＡのクイズ大会をとても楽しみにしています。万年ビリ、お客さんのようにちんまり列席していたドリケルの生徒。その学校が、今年はなんと優勝したのです！

１等の賞金はひとり 300 ルピー（約 480 円）、たぶん価値から言えば、日本円で 3 千円くらい。ダサイン祭に好きなものが買えるでしょう。大変な喜びようで、ドリケルの生徒のひとりは、１等の賞状を手にして歌まで披露してくれました。これを見ていた私、渥美、は年のせいか、思わず泣けてしまった。
ちなみに一番面白かった出題は、「世界の国の中で一番短い国名は何でしょう？」
正解は中国。ネパール語で中国のことを「チン」と呼びます。
また、「コンピューターをネパール語でなんと言いますか」正解はスサンキャ（膨大な数という意味）「E-メイルの正式名称は？」など、ハイテクも混じっていて、なかなかあなどれないものがありました。このクイズ大会、地味なものですが、生徒たちは毎年すごく楽しみにしています。そして勉強への励みにもなります。来年ももちろん行いますよ。応援してくださいね。また、このイベントは、我々NBSA のスタッフにとってもなかなかのお楽しみ。今回は、総指揮を経理のビソが仕切り、総合司会は総務のヤダブ。副会長プララダの開会宣言。現役のラジオ・アナウンサーのオム・プラカスの閉幕の挨拶と、男性役員が大活躍しました。

クイズ大会の意義

誰もが公平な教育を受けることができたら、障害に関わらずその学力は、一般の学童となんら変わらず、また教育を受ける権利をもっていることを、広くネパールの人々に訴えることを目的とした。さらに通常注目を浴びない地方の学童にも、首都の学童と肩を並べ、参加する機会を持たせる事も目指した。

写真左：優勝したドリケルの生徒たち　　写真右：　惜しくも優勝を逃がしたサノティミの生徒。
中央の美人さんは来年卒業。３回出場してついに優勝ならず。

ネパールとの出会い

日本点字図書館理事長、田中徹二

私がネパールと係わるようになったのは、1985 年、東京ヘレン・ケラー協会が国際協力事業を始めるに当たり、同協会字出版局長の井口淳さんにネパールに行って、視覚障害者の支援で何ができるか調査してきてほしいと頼まれてからです。当時のネパール盲人福祉協会会長のプラサド博士などにお話を聞き、学校を訪ねて感じたのは、一般学校で学ぶ盲児童・生徒に点字教科書が充分に行き渡っていないことでした。リソースルームの先生が点訳した１冊を回し読みしているか、せいぜいサーモフォームでコピーして２冊で勉強している姿でした。比較的に恵まれているカトマンズのラボラトリー・スクールやポカラのアマルシンスクールでそうだったので、ましてや地方の学校ではリソースルームもないし、点字を知っている先生もいないのでその悲惨さが想像できました。

井口さんには、盲人協会に点字製版機を寄贈し、点字教科書を作らせたらどうかと進言しました。カトマンズでも停電が多いことから、電動式ではなく足踏み式製版機がいいということになり、早速インド経由で製版機が届けられました。日本では亜鉛板に点字を打ち込む製版が普通ですが、亜鉛板が手に入らないのでビニール板で代用し、点字の製版ができる人を東京に招いて養成しました。

その後、ヘレン・ケラー協会の職員も出かけていって指導した結果、時間はずいぶんかかりましたが、小学校から高校までの点字教科書がすべてそろい、今では、どんな偏狭な地域の学校からでも、盲児童が入学したのでという連絡があれば、点字教科書を供給できるようになっています。

30 年を過ぎた今では、高校卒業資格試験に合格する盲生徒は、毎年数十人に及び、その人たちがみんな大学に進んだとすると、日本の盲大学生をはるかに超える数になっています。最初、私が訪れたときには、大学を卒業した盲人はほとんどいなく、わずかにインドの大学を卒業したという人に一人会っただけでした。今と比べると雲泥の差です。

高学歴の視覚障害者を育て、社会的な活動ができる人を養成すれば、視覚障害者の地位向上につながり、一般の視覚障害者の生活にもいい影響を及ぼすだろうと考えた当初のもくろみはほぼ達しつつあります。まだ若い人たちが多いのでこれからですが、20 年後、30 年後には高い社会的地位を獲得する盲人も出てくるものと思われます。

このネパールでの経験は、現在の私の国際協力事業につながっています。日本点字図書館に来て、1993 年からアジア盲人図書館協力事業を立ちあげ、2004 年からは若い視覚障害者を対象に、ICT 訓練講習会を開催しています。いずれもスポンサーを見付けて実施していますが、前者ではカトマンズの当会（支える会）で、コンピュータ点字製作技術指導講習会を 2006 年に開きました。また、後者では、マレーシア、東京に、ネパールから何人もの若者を招いてコンピュータ訓練をしています。なかなか優秀な視覚障害者が毎年参加しており、大学を卒業した視覚障害者が着実に実力をつけていることをしみじみ感じています。今年の ICT 講習会には、全員で 17 人のところ、４人もの視覚障害者がネパールから参加しました。ほかのアジア地区に比べて、それだけ優秀な人が多いということです。渥美さんのように、現地にしっかり足をつけ、地道な活動をするというわけにはいきませんが、これからもこうした事業を通して、ネパールの視覚障害者に応援していきたいと考えています。

それにしても、私に国際協力事業の大切さを教えてくれ、王制時代にネパール王賞（ゴルカ・ダクシン・バフ）をもらった井口さん、そして、東京ヘレン・ケラー協会からヘレンケラー・サリバン賞を受賞し、受賞式に息子や娘を連れて東京に来たプラサド博士が、今年相次いで亡くなりました。寂しい限りです。（写真中央、田中先生。点字製作技術指導講習会 2005 年カトマンドゥ撮影）

平和復興省の活動と課題

谷川昌幸（長崎大学教授）

平和復興省(Ministry of Peace and Reconstruction)は，紛争後ネパールの平和構築において中心的役割を担う政府組織であるにもかかわらず，日本では一般にはまだほとんど知られていない。そこで以下では，この省の概略についてご紹介することにしたい。

１．平和復興省訪問

平和復興省の現状を見るため，この８月下旬，シンハダルバール内の本省を訪問した。

シンハダルバール官庁街は，紛争激化以前は，誰でも自由に出入りできた。西側正門から入ると右前方に議会棟があり，そこにはいつも陳情団が来ていたし，各省の事務局をのぞくと，こちらにも陳情組がいつもたむろしていた。シンハダルバール官庁街は，ネパール政治文化の縮図のような興味深い見学先の一つであった。

ところが，いまは一般市民は壮麗な正門からは入れず，南側の通用門に回される。しかも警戒は厳重で，用件を具体的に説明し，用務先の確認を受け，さらに持ち物検査をパスしないと，入れてもらえない。一般市民や観光客の入域はまず無理である。

入域許可を受け通用門を入ると，シンハダルバールは別天地である。掃除が行き届き，美しい花々が咲き乱れ，高級車が整列駐車し，高級官僚や外国人要人らが行き交う。庁舎の主な部屋には最新エアコンが設置され，ビル内も快適である。物売りや陳情団はどこにもいない。

平和復興省は，そのシンハダルバールの南側通用門を入って西側すぐの大きなビルの中にある。職員は約80名。

平和復興省棟に入り，チェムジョン大臣に面会を求めると，あいにく大臣は多忙で，しばらく待つことになった。じつは数日前，駐屯地収容のマオイスト24名が，無許可で武器を持って外出し警察に拘束されるという大事件が発生していた。これは包括和平協定違反であり，停戦監視にあたっているUNMIN（国連政治ミッション）の責任問題も表面化し始めていた。当然，所管の平和復興省は大騒ぎとなり，この日も大臣はUNMIN幹部と善後策を協議していたのである。

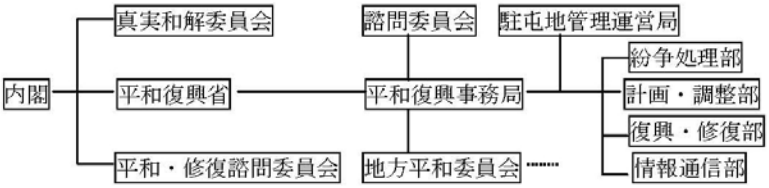
幹部から省の仕事について話を伺いながら30分ほど待っていると，チェムジョン大臣が戻られ，大臣室で30分ほど，平和基金の現状や真実和解委員会の見通しなどを中心にお話を伺うことができた。

２．平和復興省の設立目的と構成

平和復興省は2007年4月に設立された。「平和」そのものを所管する省としては世界初ともいわれ，日本でも平和省設立運動の中で注目され始めた。

①平和復興省の設立目的：和平合意の実行・監視・評価，紛争被害の調査・救済・復興，持続的平和のための制度整備，平和情報・広報センターの設置，真実和解委員会に関すること，人民解放軍駐屯地の管理運営，平和基金の運用など。

②平和復興省の構成：



３．二つの平和基金

平和復興省の活動を資金面で支えているのが，ネパール政府の「平和信託基金」（NPTF，2007年2月設立）と，それを補完する「国連ネパール平和基金」(UNPFN，同年3月設立)である。

①NPTF：ネパール政府，英国，ノルウェー，フィンランド，デンマーク，スイスなどが資金拠出し，駐屯地建設，収容戦闘員給与（３千ルピー／月）・諸費（72～110ルピー／日）支給，紛争被害救済（帰郷費・住宅建設費・教育費補助，無利子貸付），選管支援などを実施。

②UNPFN：国連平和構築基金，英国，ノルウェー，カナダ，デンマーク，スイスが資金拠出し，制憲議会選挙支援，駐屯地収容戦闘員の資格審査，武器管理，社会復興支援などを実施。

４．今後の課題

平和復興省の管轄は広範であり，活動資金がつねに不足している。また，真実和解委員会についても，加害者無処罰への批判や運用面の難しさから，実際にはまだ手つかずの状態である。さらにより根本的には，和平の大枠が政治的に確定してしまわないと，平和復興省の行政努力にも限界がある。 このように，平和復興省の前途は多難だが，地道な努力で成果を上げていくことができるなら，ネパール平和構築への貢献は元より，世界の「平和省」のモデルとなることも夢ではないであろう。

ネパールよもやま話　今年も巡ってきました、ダサイン大祭

1 年中まつりに囲まれたネパールで、最も大切なのがダサイン大祭。本当は 10 日間続く祭だが、ちょっと長すぎるので縮小傾向にあり今年は 7 日。と言っても、ほとんどの人は公然と 10 日間は休む。今年は 9 月 25 日から 10 月 1 日まで。本来は、ヒンドウー教徒の祭だけど、チベット仏教徒やイスラム教徒も休むときは休む。このあたり、チームワークがよいのだ。まさに、日本の正月の雰囲気で、レストランも休業するので旅行者にはちょっと大変。ダサインは、邪悪な神を正義の大女神、ドゥルガが征伐した善の勝利の日。

正月のような祭なので、その支度はかなり手が込んでいる。まず、10 日前に部屋の暗いところに素焼きの皿に大麦をまく。ダサイン初日に黄色くひょろひょろっと伸びた芽を摘んで、誰もが髪に飾る。ついでに赤い花などでアレンジするが、おっさんの髪飾りスタイルはダサインですよ。同日、カトマンドゥの旧王宮広場などで、水牛 108 頭をとさつし、神にささげる。このドゥルガ神の絵葉書など街角でよく見るが、形相はかなり怖い。この屠殺の一般家庭でも行う。水牛は大きすぎて大変なので、主にヤギ、ヒツジ、ニワトリ。その血を車に塗り、交通安全祈願をする人も多い。

儀式が終わった後は大宴会。1 年中着た服を新しいのに着替え、普段口にできない肉を家族全員で盛大に食べる。本来は、生命力を高め、穀物の豊かな実りを祈願する祭だが、家族が一同に集まり賭けトランプをしたりする、やっぱり日本の正月に一番近い祭かな。

（写真は生贄用のヤギ（左）とヒツジ（右）共に黒いのがおいしいそうだ。
撮影：カトマンドゥのカシバザール、カシ・バザール・ヤギ市場にて）

ＮＢＳＡ人気シリーズ、ネパールの民話　ガネシュ神とお百姓さん

むかし、むかし、パタンにひとりのお百姓さんがいました。このお百姓さんはカトマンドゥのクベナ・ガネシュ寺院の近くに田んぼを持っていました。ある年、米が不作になったので、お百姓さんは寺院に出かけてクベナ・ガネシュにお願いしました。「神様、来年は豊作になりますように。もし私の望みを叶えてくれたら、私はあなたに、ほかの人のような四つ足の生き物ではなく、八つ足の生き物をお供えをすることを約束します、と誓いました。

当時の人々にとって　願いが叶ったり、幸運が巡ってくると、神様に生贄をささげて感謝するのは当たり前のことでした。参拝者が連れてくる生贄の代わりに、幸運の神ガネシュは、人々からいつも見返りを求められました。そのため　お百姓さんの願いにもガネシュ神は驚きませんでした。でも、八つ足の生き物には興

味をそそられました。ガネシュ神は考えた末、お百姓さんの願いを叶えてあげました。翌年、お百姓さんの田んぼは他の誰もおよばないほどの大豊作でした。ガネシュ神は約束を守ってくれた、とお百姓さんはつぶやきました。お百姓さんは米を蔵に納めて、クベナ・ガネシュ寺院に参拝に行きました。
ガネシュ神は、疑うような眼差しでお百姓さんを見つめました。そこでお百姓さんはカニを持ち出し、謹んでガネシュ神に差出しました。ガネシュ神の好奇心は満足しましたが、このお供えには失望してしまいました。でも、ガネシュ神に文句が言えるでしょうか？
お百姓さんは、脚８本の生き物をお供えするという約束を、ちゃんとは守ったのですから。

事務局便り　　日本事務局担当　高梨憲司

仲秋の候、皆様にはお変わりございませんでしょうか。各地で大規模な地震や水害が発生し、多くの犠牲者が出ています。国際的にも地球温暖化の防止がクローズアップされています。また、日本では半世紀ぶりに政権が交代するなど、世界の目まぐるしい動きに翻弄されるばかりです。そんな暗い話の多い中で、NBSA には心の温かくなる話題がありました。　以前にネットニュースでご紹介した話題ですが、渥美会長から「現地で使用するウォークマン寄贈のお願い」をネットニュースに掲載したところ、東京都八王子市にお住まいの会員（村山　満さん）からすてきなウォークマン４台の寄贈をいただきました。

しかしながらカトマンドゥまで届ける方法に困りました。郵便で送ったのでは多額の送料がかかりますし、現地に確実に配達される保障がありません。そこで、再びネットニュースを通じて配達してくださる方を募ったところ、同じ八王子市にお住まいの会員（小島純子さん）から申し出をいただき、無事に現地事務所に届けられ、使用されるネパールの視覚障がい者から喜びと感謝が寄せられました。まさに会員の連携プレーがもたらした成果で、事務局を預かる者としても喜びの限りでした。関係者に心より御礼申し上げる次第です。

なお、現地では引き続き使用可能なウォークマン、拡大鏡（ルーペなど小型の物）カセットテープ（新品に限る）を求めています。皆様やお知り合いの方でご寄贈いただけるこれらの物品がございましたら、是非、事務局までお知らせください。配達についてはネパールに定期的に行かれている岩手県在住の松田さんから、嬉しい申し出をいただいています。

会費納入のお願い

９月末現在の会費の納入状況は６０パーセント（会員６５名中３９名）に留まっています。厳しい経済情勢の中で誠に恐縮とは存じますが、振込取扱表を同封させていただきましたので、会費未納の方は早めに納入をお願いいたします。（既に納入済みの方は次回にご使用ください）また、事務局では協力会員（総会における議決権はありませんが、ネットニュースや会報をお送りさせていただきます）も募集しています。お知り合いで会の趣旨にご賛同いただける方がございましたら、是非、ご紹介ください。

なお、会費の他に１１名の方から８万円余のご寄付をいただきました。ここにご報告し、感謝とさせていただきます。ありがとうございました。

Nepal Blind Support Association（NBSA） P.O.Box:8974 PCN-111 Katmandu Nepal Tel:977-1-4425-709、 E-mail: NBSA@mail.com.np / yorikonepal@hotmail.com
日本の事務局: 〒284-0005、千葉県四街道市四街道 1-9-3、視覚障がい者総合支援センターちば内 NBSA 電話:043-424-2501 Fax:043-424-2486 事務局担当者 高梨、憲司 NBSA HP:http://NBSA.sakura.ne.jp/
維持会費：個人会員年間 6,000 円/協力会員年間 3,000 円/法人会員年間 15,000 円 振込先：口座記号番号 00190-7-762775（ネパールの視覚障害者を支える会）